

第二十九回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

## 教科書における鎌倉仏教論

中尾 堯文

中尾でございます。私に課せられましたのは、「教科書における鎌倉仏教論」ということでございます。偶然かどうかわかりませんが、非常に大変な課題を課せられました。とともに、大変うれしく思った次第であります。

私は、教科書の体験というのは非常に微妙な体験をしております、昭和六年生まれですので、小学校ではなく国民学校出身です。五年生の時に、まず『国史・上』という教科書が配られました。その第一ページを開けますと、神武天皇の弓の上に、金鷄、金のトビがぴかーっと光っている口絵がございまして、まず神話から始まったのです。ですから、高天原だとか、ニニギノミコトだとか、神様の名前をよく覚えさせられました。

実は昨日、新宿で日蓮聖人の遺文講読の講座をやっていて、神国王御書を読んだのですけれども、その初めは、まさに神話なのです。『日本書紀』の神代巻というのが一冊ございすけれども、まさに神々の世界です。イザナギノミコト、イザナミノミコトが天の浮橋に立って日本の国をおつくりになったという話。それから、天照大神からずつと下がりまして、神武天皇の東征、橿原宮で即位というような、そういうような神話から始まったのです。

中学に参りましたら、中一の時に終戦ですけれども、ここに書いておりましたけれども、中学校に入った途端に、

五月二十二日、学校授業停止令が發布されまして、私どもは学校に行けなくなりました。何をしたかという、毎日土方をいたしました。堤を造り、田んぼを耕し、毎日が勤労でした。そして八月六日に、私は広島ですので、原爆。大変なことでした。そして十五日に、ちょうど私の寺のお施餓鬼の日に、日本は負けました。

九月になりました、学校に行くことになったのですが、その学校には、野戦病院ということで、負傷兵がたくさんおりました。授業にはならなかったのですけれども、曲がりなりにも授業らしいことはいたしました。そのときに、教科書を、ご存じのとおり、墨で消すことをやりました。従って、日本史の教科書というのは、一年生に入る時にもらった教科書を持ってきてはいけないということでした。その年の十二月に日本歴史禁止令が出まして、日本史は絶対に話してはいけないということですから、日本史を習ったのが、九月、十月、十一月の三か月だけ。日本の縄文時代から、奈良時代の半ばぐらいまでで終わったのですが、それからは、全然日本史は学んでおりません。

高等学校になりました、日本史教育の再開が二十五年でございます。二十五年に私は、高等学校二年生でした。しかしながら、困ったことに、教科書がないのです。教科書なしに日本史の学習をしなくてはいけない。そういう状況でございます。ですから、私どもと同年輩の方々、歴史学者がたくさんいらっしゃいますけれども、恐らく中学校、高等学校では、日本史の授業を満足に受けていらっしゃらないのではないかと思います。昭和二十六年に卒業ですが、大学受験のときに大変でした。日本史で受けるのか、あるいは世界史で受けるのか、歴史はやめて時事問題でいいのか、社会でいいのか、そういう選択が迫られたのです。しかも、手元には教科書はないのです。

昭和二十五年に、ここに『日本史概観』という書物がありますが、これは復刻版ですけれども、こういう本が出たのです。昭和二十五年の二月です。ですから、二年生になる時に出ました。しかし、これは、部数がそんなに多くなく、先生だけが持つのです。われわれ学生は教科書なしです。従って私は、受験という中では、日本史はやめました。ですから、私どもと同年輩の方は、恐らくともに日本史の勉強をしないで、ご自分の関心の中で日本史を選ばれた

方だと思っております。昭和二十六年ぐらいまでに高等学校を卒業なさった方々は、自分の関心の中でしか日本史を見ることができなかつたのではなからうかと、そう考えております。

それで立正大学に入りまして、史学科に入ったわけでございますけれども、立正大学の史学科で井上光貞先生という素晴らしい先生にお目にかかりまして、自分の一生が変わった経験がございます。

さて、日本史教育の再開というときに、二十五年の二月にこの本が出たわけですが、これが、その後の教科書の一つの基準になったようです。この『日本史概観』は東大の史学会で作ったのですが、これを基にしてそれから後のものができていくのではなからうかと考えております。資料に書いておきましたが、筆者は、安藤・井上・大久保・笠原・関・尾藤・安田先生という新進のメンバーです。今、申しました井上先生という方が、昭和二十三年から立正大学の講師にいらっしゃいました。そういう巡り合わせがございました。

そこで、改めてこの本を開いてみましたら、いろいろ新しい見方も書いてあるのですが、今までの中学校の日本史の内容は、日本の神話と縄文・弥生というような歴史学の成果を、うまくない交ぜにした内容でございました。その中から神話的なものを抜いたのが、大体この内容と考えるとよろしいのですが、厳しい見方によりますと、あまり新味はないです。新味はないのですけれども、従来を考え方を踏襲しながら、神話的なもの、天皇制的なものをマイナスしたものが、新しい方向で出てまいりました。

中世の日蓮聖人ということですので、その記述されている場所を申しますと、第三章の「中世封建体制の成長」という所に仏教が入ってきます。「中世封建体制の成長」の所では、古代国家（奈良時代）・貴族（平安時代）を踏み越えて、武士や庶民を対象とした新しい仏教が起ってきた。これが、鎌倉仏教に対する叙述でございます。

そして、第三節の所に「新仏教の興隆と中世文化」とあります。その文化の中で、第一に「新仏教の創立と旧仏教の覚醒」。「十世紀の末葉になると、わが世を楽しむ一部の藤原貴族のほかに、幾多の失意と没落に沈む貴族が増えて

きた。この傾向は、武士階級の台頭、武家政権の確立等によっていよいよその度を深めていった。時代と政治の大きな移り替わりの時期であった十二世紀末にかけて、没落してゆく貴族階級の間から、あるいはまた、新しく立ちあがる武士等の要求に応じて、幾多のよそおいをこらした仏教が生まれた」と述べています。つまり、古代仏教を克服した上に、新しい世の中にふさわしい仏教として、鎌倉仏教を位置づけたわけです。

それは、「浄土宗・一向宗・時宗・臨濟宗・曹洞宗・日蓮宗等がそれである」。先ほどお話がありましたけども、莊園の没落によって貴族階級が衰退していく。それに代わって武士階級が成長していく。その要請に応じた新しい仏教として、鎌倉新仏教を意味づけていました。宗祖の宗派を開いた年に従って、その順に、浄土宗・浄土真宗・時宗・臨濟宗・曹洞宗・日蓮宗と述べています。

そして、そのもとに末法思想という思想を説明します。末法思想というのは、釈尊が亡くなってから最初の一千年を正法、次を像法、その次を末法。万年が末法です。末法には全ての仏教がなくなっていくという、そういういった終末観です。末法に入った頃の日本では、貴族だとか、あるいは有力な神社は、広大な莊園を持って寺を運営していたのですが、その莊園がだんだんと武士によって蚕食されていくと、力を失ってしまう。そういう図式が、はっきりと説明されておりました。そのときに逆に力を持つてくるのは、武士であり、庶民であるという考え方です。

そして、新しく成長してくる武士・庶民といった人たちは、貴族層だとか神社の方から考えてみますと、修行や作善が困難な庶民とある、二枚目に書いてあります。「修行や作善が困難な庶民にとって、容易に実践でき、信心一筋で成仏できる仏教が切実に望まれた。この要請に応えたのが鎌倉新仏教で、信心・易行・選択」。「せんたく」と読んで良いのでしょうか、仏教で読むと「せんじやく」です。これらの「三要素が共通している」。これが鎌倉新仏教です。今まで古代仏教の寺院というのは、自らが広大な莊園を持って、貴族の寄進によって塔を造り、あるいは法要を営んでいく。そういう貴族仏教を脱却して、民衆宗教の萌芽が鎌倉に出てくる。そういう考え方が基本となっていま

す。

その中で、漁夫の生まれで、法華経による立宗・他宗排撃・他宗の影響・武士と商工業者への布教などをもって、日蓮宗が生まれたという叙述があります。「安房国東条の漁夫に生まれた日蓮は、建長五年に法華経によって一派をうちたてた。日蓮宗は開宗が他宗におくれたため、諸他の宗派を排撃しながら、また、それらの宗派の思想や称名念仏の方法をとり入れながら、発展していった。この宗派は主として武士ならびに商工業者などのあいだにうけ入れられていった」と、そういう記述がございます。

仏教史の研究動向を考えておきますと、当時脚光を浴びたのが井上光貞先生の『浄土教成立史の研究』で、立正大学で井上先生が講義されたのが、浄土教成立史の研究です。非常に高度でございまして、日蓮宗の宗立大学で浄土教の研究を講じられたというのは、非常に違和感があるということをよく宗学科の学生は言っておりましたけれども、立正大学で浄土教の講義を随分なさったことを覚えております。また、笠原一男先生にも親しくしていただきました。その先生がおっしゃるのは、今までの貴族仏教に対して、信心・易行・選択の三要素。「これが新なんだよ」ということを、よくおっしゃっておりました。

そういう浄土教というのは、世の中は次第に廃れていくのだという末法思想に触発されて、現世の救いを諦めて、来世に極楽往生しようという考え方が広がってくるので、日本の古代国家が次第に衰退していく、その姿を表すのが浄土教だという論理です。そして、それに対して、新しい武家の宗教として鎌倉新仏教を考える。しかし、それは、浄土教を中心に考えている。日蓮宗というのは、どちらかというところ「日蓮宗もあつた」という考え方で、非常に付随的な位置付けだと思ふのです。ですから、中世国家と簡単に言つていいかどうか分かりませんが、古代から中世へ移つていく動きの中で、宗教の動向を浄土教によって説明していく。それが主流でして、日蓮宗の現世主義というのは、どちらかというところ二次的に考えられていくのではなからうか。

私は、立正大学の大学院を修了しましてから、立正大学の附属の中・高の教師をいたしました。その後には、今度新宿高校の講師をいたしました。その頃、いろいろな学生の反応を見ておりました。立正高校には日蓮宗のお寺さんの子がたくさんいるのですが、日蓮聖人の話をしましても、積極的には関心を持ってくれないのです。どうしてなのでしょう。かと思分悩んだのですけれども、それはやはり、今言いましたように、教科書の中の日蓮の叙述というのは、日本史の古代から中世へという大きな移り変わりの中から「日蓮」を説明しておりますので、なかなか自分の寺院での生活とは雰囲気違ってくるのではないかと思つたところです。

しかし、やはり日蓮宗を説明するときに、日蓮聖人が漁夫の生まれである、民衆の生まれである。こういうのが、次の室町時代の民衆宗教の時代という考え方とつながっていくのではないかと思います。第七節に、「文化の地方普及と庶民文化」という節が入ってくる。室町文化です。民衆文化の発展です。「日蓮宗の受容者は、主に関東地方の武士と、京都をはじめとする商工業者とし、この時代に広く教勢を伸ばした。特に京都での勢力は大いに振るい、細川晴元と対立する山科本願寺を攻略したが、やがて比叡山と対立して戦い、京都市中の二十一ヶ本山」、天文法乱です。「焼き払われ、しばらく地方に退散した」。そして、「禪・浄土・日蓮等の諸宗派は、地方の武士や都市の商工業者と密接に結びついたが、農民や職人等直接生産者のあいだに勢力を伸ばしたのは、一向宗である」。これは、笠原一男先生の文章です。

日蓮宗の記述というのは、大体室町時代で終わりです。それ以降、教科書には、日蓮宗という言葉は一言も出てきません。今、言いましたのは、『日本史概観』の記述に沿ったこととして、私の考えとは少し違いますので、念のために申し上げておきます。

さて、この教科書が出ましたのは、私が高等学校を卒業して、立正大学の夜間部に通っていた二年生になった時で、新しい教科書につきましては、私は何も存じませんでした。その新しい教科書の基となったのは何かというと、昭和

二十六年の「学習指導要領」社会科です。これは文部省から出ました。日本史の目次の中に、古代社会の「貴族社会没落」の項に、「荘園における武士勢力の増大」、「荘園没落の社会的影響」、「末法思想と浄土」が列挙されています。これは、全く『日本史概観』と同じ内容です。その説明の中には、荘園制の没落による貴族・寺社の衰退が、末法思想を実感させるようになった時代背景は何か。はつきり話を説明しています。「荘園の衰退のなから武士が起り、鎌倉新仏教を生み出す基盤をなした」と、そういうことも書いてある。次に「封建社会」という項がありまして、「貴族から武士へ」の項の所に、「武家政権の確立」、「農業生産力の発展」、「新仏教の発生」とあります。

これらを全体的に読んでみますと、古代末期から鎌倉時代への転換期を、貴族社会の衰退と武家社会の興隆と捉え、仏教史をこのような歴史の表れとして見ています。ここで提起された歴史の事象は、終末観を意味する末法思想で、浄土教の展開が主軸として叙述されており、今まで申しましたことと同じことです。「中世では、武士階級を主客とする禅宗・日蓮宗が新仏教として扱われるものの、やがて民衆宗教の担い手として一向宗が脚光を浴びる」。こう見ておきますと、古代末期から中世にかけての仏教史の文脈は、浄土教を主軸にして展開されて、論述がされている。これが特徴なのです。

昭和四十何年でしょうか、金子日威宗務総長が、「日蓮の記述について誤解を生むから、これは直してくれ」という話を文部省にお持ちになったことを、文部省のほうから聞きました。当時、知人がおりました、「どう直せばいいんだね」と、そういう話を聞いたことがあります。日蓮宗からの申し入れというのは、日蓮聖人の信仰の中からの申し入れであって、今まで申しましたような教科書の文脈の中での日蓮とは意味づけが違う。だから、申し入れをいただいた文部省も、随分困ったようです。

昭和二十六年の学習指導要領を踏まえて、昭和三十一年にもう一回出てまいります。「鎌倉時代の文化について」の項ですが、「鎌倉時代の新仏教の展開にしても、それがどのような時代の欲求に基づいて生まれたかを考えさせ、

旧仏教との差異を明らかにすること」。当時の仏教史の考え方では、旧仏教を克服される客体と考えて、旧仏教をどのように克服して、どのように新しい信仰を打ち出すが新仏教であると、そういう論理が支配的でした。そのような基本的見解が、ここにくしくも表れているわけです。

室町時代の文化はどうかというと、「貴族文化の伝統とともに、それが庶民性を帯びていることについて、庶民生活向上との関連において考えさせることが必要である」。常に庶民の生活と結びつけて考える。「鎌倉時代の仏教について、新仏教の対立という概念で理解し、その差異は貴族社会から武家社会へという時代性の反映として捉える」。だから、常に前時代を克服していくという考え方を、基本的に打ち出しています。「室町時代の仏教については、庶民の自立傾向を前提として、庶民仏教の成長を特徴づける」。いろいろ申しましたが、大体このような図式で叙述されておりますので、鎌倉新仏教の旗手としての日蓮宗という考え方は、教科書には求めようがないのではないかと考えます。

続きまして、昭和二十七年の史学会編『日本史』、山川出版。これは教科書です。この教科書も、もう残部がないので、深川に教科書センターの図書館がありますので、そこに貴重本として架蔵されています。それを見に行つたのですが、「文化と伝統と創造」という、中世の部に項目が立てられています。全部読むわけにはいきませんが、次のページの一番下から三行目ぐらいに、「また寺・仏像の造立、荘園の寄付などを必要とせず、信仰さえあれば在俗生活のままでだれでも救いにあずかることができる」。要するに、庶民はお金がなくても信仰できる、それが新仏教である。そういうことを結論づけているのです。

そう考えてみますと、次のようなことがいえると思います。「鎌倉時代における文化の諸相は、武家勢力の優位性の反映とみるとともに、衰退する公家が体现する伝統文化の営みにも評価を与える」。少し説明しなくてはなりません。とにかく新しい、前代の仏教を克服する姿で、鎌倉新仏教は現れる。そうすると、克服される旧仏教は全て崩壊



してしまうのではなく、その中からも新しい芽が出てくるのではないだろうか。つまり、旧仏教の中にも画策運動というのが出てくるのだらうと、そういうことを言っているわけです。「衰退する公家文化が体現する伝統文化の営みにも評価を与える」。評価をしないのではなくて、その中にも新しい動きがあるのだらうと。この公・武の文化はやがて室町時代になって融合を果たし、そして北山・東山文化に結実するという、文化史の構図を描いています。

「鎌倉新仏教は、作善を主体とする平安時代の貴族仏教を克服して、信仰を旨とする庶民仏教としての性格をもつものである。浄土宗・一向宗・時宗・臨済宗・曹洞宗・日蓮宗が、新仏教として姿を現す」。何回も同じことを言ってます。恐縮なのですが、こういう考え方が、この山川出版社の教科書にも入っております。日蓮についての記述は、次の要点です。一、生まれながらの庶民である。二、他宗を攻撃した。三、他宗の信仰形態をとり入れる。四、独自の法華信仰の境地を開く。五、武士・商工業者に受け入れられる。それが、「室町時代の日蓮宗は急激に勢力を伸ばし、京都では法華一揆をおこすほどであった」。これを語る史実が天文法乱です。この間、中公新書で話題を呼びましたけども、「日蓮宗は戦国仏教である」という論理ができてくるわけです。大体、全体の構図については、ご存知かと思います。

実は教科書図書館で教科書を見ておりましたら、懐かしい文章に遭遇しました。昭和三十七年・三十九年の日本書院『日本史』。現在は出ておりませんが、日本書院の『日本史』の編纂に関わりました。第四章「武家社会の形成と文化の動向」の第三節「文化の新傾向」という所は、元の原稿は私が書きました。原稿を出しますと、ガリ版という印刷があり、刷って編集会議に出されます。そうすると、偉い先生がたくさんいらっしやいまして、くそみそにたたかれました。訂正に訂正を重ねたのが次「武家文化の成長」という文章です。

そのときに私どもは、どういう編集をしたか。もう時効ですから、言ってもいいのではないかと思いますけども、私どもが書いた原稿が目の前にありますと、こちらにたくさん、山川とか実教だとか、中教だとか、三省堂だとか、

そういう教科書を山と積んでおきまして、それと比べながら話をしていくのです。その会議で私は、「日蓮というならば、龍ノ口法難を入れたらどうでしょうか」という話をしました。随分強く主張したのですけれども、ここに来ている先生方は龍ノ口法難を史実として信用しておりませんでした。かつて東大のある先生が「龍ノ口法難はなかった」という説を出され、国柱会をはじめとして大変な大反対運動が起こったことはよく知られています。その後、鳴りを潜めたのですけれども、結局、龍ノ口法難を積極的に認めようという意見は私一人で、とうとう実現しませんでした。一度だけ、龍ノ口法難というのを書いて文部省へ出しましたら、赤い附箋が付いてきまして、「これはだめ」というので。従って、龍ノ口法難は、教科書には出ておりません。

いろいろ申しましたけれども、考えてみますと、こういう結論が可能かと思えます。「戦後の日本史教科書は、昭和二十五年に刊行された史学会編『日本史概観』を出発点とする。この内容に従うような内容で、昭和二十六年に学習指導要領社会科が文部省から出され、高校日本史の教授方針が定立した。ついで二十七年に出版された山川出版社の教科書『日本史』は、昭和二十五年『日本史概観』の基本線に沿った内容である」。従って、私もが教科書を作るときに常に一番意識したのが、山川出版の『日本史』です。読んでみて、新しい考え方をどなたが言うのと、「山川の教科書には、こう書いてあるぞ」とって誰かが言うんです。そうすると、他のものを見て、「それはやっぱりまじいんじゃないか」というんで入れなかつたり、あるいは入れたりするんです。昭和二十五年の『日本史概観』の基本線に沿った内容が、恐らく現在も通っているんじゃないでしょうか。

「鎌倉新仏教についての論述の前提として、平安時代後期における貴族社会の衰退と武士の勃興をあげ、ついで武家政権の確立による武士の時代の到来として鎌倉時代の社会相を叙述する」。ここでは、仏教のたどった歴史の原理を、末法思想に求めております。これは間違いないところです。末法思想に求め、浄土教の展開を軸に、鎌倉新仏教の成立とその特色を説明します。結局これが、時代の姿を表す宗教として、浄土教が取り上げられた理由だと思いま

す。さらには、室町時代の仏教の動向を庶民化に求めて、一向一揆と法華一揆にその表象を求めることになっていきます。

このときに私が、笠原一男先生から随分突っ込まれたんですけどね、日蓮宗の室町時代の僧として、日親上人を挙げたんです。そうすると、蓮如というのは、当時の一向一揆に象徴される浄土真宗の組織・教団を、まさに代表する存在である。これは間違いのないことであると。日親は、当時の日蓮宗全体を代表する僧であるかという、こういうことを厳しく問い詰められたことを、よく覚えております。歴史教科書の中で人物を取り上げるのは、実に困難なことです。限られた字数と固有名詞と語彙の中で、適切な叙述を完成しなくてはならない。そのうえ、特に宗教者の経歴は神秘に包まれていて、その実像を描くことは、教科書でなくとも困難を極めます。

考えてみますと、日蓮聖人のご生涯の実像を描くことは、これは不可能だと思っています。可能なわけではない。なぜかという、日蓮聖人の生涯を描くイメージは、日蓮聖人自身の著作しかないのです。外からの著作は、全くございません。そうすると、日蓮聖人は、自分の生涯を法華経という信仰で読んでいますので、これは客観的な事実とは違うと思います。これは私見です。「その上、特に宗教者の経歴は神秘に包まれていて、その実像を描くことは教科書でなくとも困難を極める」。不可能だと思います、はつきり申しますと。「限られた史料によって、現象面を辿る試みを根気よく続けなくてはならない」。これは当然のことでしょう。

日本史の教科書に見る鎌倉新仏教、日蓮の叙述について考えるとき、立正中・高で教鞭を執った時のことをはるかに思い起こします。「受講者の中には日蓮宗寺院の子弟が多かったが、鎌倉新仏教について語ったときも、積極的に興味を抱いて学習する学生は見られなかった。学生自身が起居する寺院という環境と、歴史の実像として描かれる教科書の世界では、関心の次元が異なるからだろうか。さらには、日本史の教科書における鎌倉新仏教の記事が論じられた際、宗教の主催者たる僧侶は、これを主体的にどう受け止めることができるのだろうか」。ここには、各自の歴

史意識が改めて問われるんじゃないかなと思うかと思いません。

一言言っておきたいんですけども、昭和五十四年に私が新しく買った家に、五、六人でみんな泊まり込みをいたしました。家族はみんな下へ追い出して集まったんですけどね、そこへ来たのは、ご承知だと思いますけども、平雅行、佐藤弘夫、佐々木馨、今井雅晴、それに私。とにかくみんな、夜も寝ないで議論しておりました。その中で一番大事なことは、克服される形で新仏教が生まれたというんじゃないかと、古代仏教の変容の中に、移り変わりの中に、変質の中に新しい仏教が生まれた。そういうことを考えようじゃないかと。従って、「鎌倉新仏教」という名称じゃなくて、鎌倉仏教としての名称を作ろうじゃないかというのが、みんなの考えでした。

そういうことも考えて、今まで申しました『日本史概観』の叙述と、私どもが今、到達しております中世仏教の意味づけは、随分差があることを念のために申し上げまして、終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございます。ございました。

司会　中尾先生、どうもありがとうございました。

# 教科書における鎌倉仏教論

— 「日蓮」の記述を焦点に—

中尾 堯文

## 1) 戦後の日本史教育 GHQの指令による日本史学習の禁止

(旧制) 中学における日本史教育

(戦中の教科書) 神話と原始時代史との混交・皇室中心の歴史観

※昭和20年5月22日 学校授業停止令

8月15日 敗戦

※昭和20年12月 日本史教育の停止

## 2) 日本史教育の再開 昭和25年

昭和25年2月 史学会編『日本史概観』出版 (昭和24年の『世界史概観』と対)

筆者: 安藤良雄・井上光貞・大久保利謙・笠原一男・関晃・豊田武・尾藤昭英・安田元久

### 第三章 中世封建体制の成長

「概観」…なおこの時代の特徴として、十二世紀の頃から十三世紀初頭にかけて、新しい仏教が相次いで起ってきたことは注目すべきことである。それらのすべては、古い仏教とはことなり、簡単な念仏あるいは信仰だけによって、身分の上下をとわず、すべての人々が救われることを説いたので、急激にこの時代にひろく受け入れられた。そして仏教思想は、この時代の分化全般に強い影響を与えたのである。(P83)

◎ここでは、古代の国家仏教(奈良時代)・貴族仏教(平安時代)を踏み越えて、武士や庶民を対象とした新しい仏教がおこってきたと説明する。

### 第三節 新仏教の興隆と中世文化 1. 新仏教の創立と旧仏教の覚醒

十世紀の末齒になると、わが世を楽しむ一部の藤原貴族のほかにも、幾多の失意と没落に沈む貴族が増えてきた。この傾向は、武士階級の台頭、武家政権の確立等によっていよいよその度を深めていった。時代と政治の大きな移り替わりの時期であった十二世紀末にかけて、没落してゆく貴族階級の間から、あるいはまた、新しく立ちあがる武士等の要求に応じて、幾多のよそおいをこらした仏教が生まれたり、輸入されたりした。浄土宗・一向宗(浄土真宗)・時宗・臨済宗・曹洞宗・日蓮宗(法華宗)等がそれである。(P103)

◎荘園の没落によって貴族階級が衰退すると、これに代わって登場する武士階級の要請に応じた、新しい仏教が生まれた。これが鎌倉新仏教で、浄土宗・浄土真宗・時宗・臨済宗・曹洞宗・日蓮宗である。(以下、末法思想について叙述する)

（聖について述べ、つづいて）自分の身を苦しめることによって極楽往生の可能を説く聖の教えには、一般の人々は近づこうとしても近づき難いものであった。もっと容易に、現実の生活をつづけながら、信仰によって往生できる宗教が、社会全般の要望で、農民・職人・商人をとわず、すべての人々から要求されていたのである。そういう当時の公家・武士に答えて生まれたのが、先にあげたもろもろの新仏教であった。したがって新仏教の多くが特徴とするところは、かつての仏教が要求した厳格な戒律主義が不要なものとなり、信仰第一主義の庶民的色彩が強いものであり、…

- ◎修行や作善が困難な庶民にとって、容易に実践でき、信心一筋で成仏できる仏教が切実に望まれた。この要請に応えたのが鎌倉新仏教で、信心・易行・選択の三要素が共通している。

#### 【日蓮宗】

安房国東条郷の漁夫に生まれた日蓮は一二五三（建長五年）に法華經によって一派をうちたてた。日蓮宗は開宗が他宗におくれたため、諸他の宗派を排撃しながら、また、それらの宗派の思想や称名念仏の方法をとり入れながら、発展していった。この宗派は主として武士ならびに商工業者などのあいだにうけ入れられていった。（P107）

- ◎漁夫の生まれ・法華經による立宗・他宗排撃・他宗の影響・武士と商工業者への布教などをあげる。

### 第七節 文化の地方普及と庶民文化 4.民衆文化の発展

#### 【日蓮宗】

日蓮宗の開宗当時から、この宗派は地方の武士・都市の商人層等に受け入れられてゆき、特に関東地方に多くの信徒をもったが、この時代には京都地方に大いに発展した。一五三二（天文元年）には、細川晴元と本願寺との衝突に際し、日蓮宗は細川氏を援け山科本願寺を焼いた。こうした京都における日蓮宗勢力の増大を憎んで、山門（天台宗）の僧兵は一五三六（天文五年）京都の日蓮宗寺院二十一ヶ寺を焼き払った。この結果、京都における日蓮宗の復興は一時阻止された。（P150）

以上のような禅・浄土・日蓮等の諸宗派は中央地方の武士と密接に結びつき、その政治的・経済的支援のもとに、教団の発展・維持をはかってきたのであった。これに比して、農民・職人その他直接生産にたずさわる人々のあいだにうけ入れられ、それら人々の援助によって教団を維持してきた宗派が一向宗（浄土真宗）である。（P150,151）

- ◎日蓮宗の受容者は、主に関東地方の武士と、京都をはじめとする商工業者とし、この時代に広く教勢を伸ばした。特に京都での勢力は大いに振るい、細川晴元と対立する山科本願寺を攻略したが、やがて比叡山と対立して戦い、京都市中の二十一箇本山を焼き払われ、しばらく地方に退散した。

◎禅・浄土・日蓮等の諸宗派は、地方の武士や都市の商工業者と密接に結びついたが、農民や職人等直接生産者のあいだに勢力を伸ばしたのは、一向宗（浄土真宗）である。

※これから後、日蓮宗の記事は表れてこない。

### 3)「学習指導要領」社会科が文部省から出される 昭和 26 年

「日本史」の目次・項目をあげる。

古代社会 「貴族の没落」の項

「荘園内における武士勢力の増大」「没落の社会的影響」「末法思想と浄土教」

荘園制の没落による貴族・寺社の衰退が、末法思想を突感させる時代背景となる。

荘園の衰退のなかから武士が起こり、鎌倉新仏教を生み出す基盤をなした。

封建社会 「貴族から武士へ」の項

「武家政権の確立」「農業生産力の発展」「新仏教の発生」

◎古代末期から鎌倉時代への転換期を、貴族社会の衰退と武家社会の興隆ととらえ、仏教史をこのような歴史の表象としてみる。ここで提起される歴史事象は、終末観を意味する末法思想で、浄土教の展開が主軸として叙述される。

中世では、武士階級を主客とする禅宗・日蓮宗が新仏教として扱われるものの、やがて民衆宗教の担い手として一向宗（浄土真宗）が脚光を浴びる。

古代末期から中世にかけての仏教史の文脈は、浄土教を主軸に展開され論述される。

### 4)「学習指導要領」改訂版 社会科日本史 昭和 31 年

・「鎌倉時代の文化について」の項

鎌倉時代の新仏教の展開にしても、それがどのような時代の欲求に基づいて生まれたかを考えさせ、旧仏教との差異を明らかにすることが必要である。

・「室町時代の文化」の項

貴族文化の伝統とともに、それが庶民的性格を帯びてきていることについて、庶民生活の向上との関連において考えさせることが必要である。

◎鎌倉時代の仏教について、新旧仏教の対立という概念で理解し、その差異は貴族社会から武家社会へという時代性の反映として捉える。室町時代の仏教については、庶民的の自立傾向を前提として、庶民仏教の成長を特徴づける。

### 5)史学会編『日本史』山川出版 昭和 27 年

中世 「文化の伝統と創造」

鎌倉時代の文化の特質

鎌倉時代は政治・経済の面で公家と武士の対立を経て、武士階級の勝利に進む過程であったが、文化の面にもこれが反映していた。古い伝統の上に立つ公家文化はまったく形





## 武家文化の成長

鎌倉時代には京都を中心とする優美繊細な公家文化が指導的地位を保っていたが、新しい文化を切り開く積極性を欠いていた。これに対して鎌倉を中心として起こった武家文化は、庶民的な生活と素朴かつ意志的な精神に支えられ、新文化を創造しようとする積極性に満ち、徐々に公家文化と交流し、また仏教や宋・元の文化の著しい影響を受けながら、独自の成長をとげた。

## 新仏教

平安末期から鎌倉初期にかけて、社会の大変動に加えて、戦乱・飢饉・天災などが相次ぎ、しかも仏教界の墮落がはげしかったので、末法到来の意識はますます強められた。こうした時、人々の苦悩を救うために新しい仏教が相次いで生まれた。

天台宗から出て、新たに日蓮宗(法華宗)を開いた日蓮は、法華経を絶対視し、だれでも南無妙法蓮華経の題目を唱えることによって成仏でき、またこの世がそのまま浄土になると説いた。彼は、他宗を激しく排撃し、政治をも批判して幕府の怒りにふれ、佐渡に流されたが、のちに許されて甲斐の身延山に久遠寺を開いた。その教えは、関東や北國の武士や農民の間に広まっていった。

## 文化の庶民化の傾向

日蓮宗では蓮如と同じころ日親がでて、京都を中心に教化をし、公家の帰依をうけるとともに庶民の間に進出し、北陸・九州にも勢力を伸ばした。

京都を舞台とする伝統的な公家文化と、関東を中心とする素朴で意志的な武家文化を、対立する形で叙述する。その公家文化を消極的、武家文化を積極的と判断して、文化の加担者の交代を示唆する。それに、大陸における宋・元の輸入を指摘する。

平安末から鎌倉初期にかけての天災と社会の混乱が、末法到来の現実と意識されて、末法思想が実感をもって広まった。このような思潮が、鎌倉新仏教の起こる思想的基調となった。

天台宗から出た日蓮は、法華経至上主義を鼓吹して此土の浄土を唱え、他宗を排撃し幕政を批判したので迫害を受けた。身延山久遠寺を開き、武士・農民の間に広まった。

室町時代には日親らが現れて、庶民の間に布教活動を伸ばし、全国的な広まりをみせる勢いとなった。

### 7) 戦後の日本史教科書は、昭和 25 年に刊行された史学会編『日本史概観』を出発点とする。

この内容に従う形で、昭和 26 年に「学習指導要領」社会科が文部省から出され、「高校日本史」の教授方針が定立した。ついで昭和 27 年に出版された山川出版社の教科書『日本史』は、昭和 25 年『日本史概観』の基本線に沿った内容である。

鎌倉新仏教についての論述の前提として、平安時代後期における貴族社会の衰退と武士の勃興をあげ、ついで武家政権の確立による武士の時代の到来として鎌倉時代の社会相を叙述する。ここでは、仏教の辿った歴史の原理を末法思想にもとめ、浄土教の展開を

軸に鎌倉新仏教の成立とその特色を説明する。さらには、室町時代の仏教の動向を庶民化に求め、一向一揆と法華一揆にその表象を求める。

歴史教科書のなかで人物を取り上げるのは、実に困難なことである。限られた字数と固有名詞と語彙のなかで、適切な叙述を完成しなくてはならない。その上、特に宗教者の経歴は神秘に包まれていて、その実像を描くことは教科書でなくとも困難を極める。限られた史料によって、現象面を辿る試みを根気よく続けなくてはならない。

「日本史」の教科書にみる「鎌倉新仏教」「日蓮」の叙述について考えるとき、立正中・高で教鞭をとった時のことをはるかに思い起こす。受講者のなかには日蓮宗寺院の子弟が多かったが、「鎌倉新仏教」について語った時も、積極的に興味を懐いて学習する学生はみられなかった。学生自身が起居する「寺院」という環境と、歴史の実像として描かれる教科書の世界では、関心の次元が異なるからだろうか。さらには、日本史の教科書における「鎌倉新仏教」の記事が論じられた際、宗教の主権者たる僧侶は、これを主体的にどう受け止めることができるのだろうか、各自の歴史意識があらためて問われるところである。